

- ◇開催日時 平成 30 年 2 月 17 日(土) 13 時 30 分～16 時 30 分
- ◇会場 奈良教育大学次世代教員養成センター1 号館
- ◇参加者数 21 名
- ◇内容

1. 陸前高田市文化遺産調査概要報告

(奈良教育大学 教授 山岸 公基)

今回調査した陸前高田市福寿庵観音菩薩坐像の像内より墨書が見つかった。「干時應仁三〇/〇/〇霜〇月」これは、応仁 3 年 (1469) 11 月であろう。

15 世紀後半の社会・文化と陸前高田市の仏像 (略年表)

宝徳元年(1449) 足利義政が八代将軍となる

応仁元年(1467) 応仁・文明の乱が起こる

(～文明 9 年 (1477))

応仁三年(1469) 4 月 28 日 文明と改元

11 月 平栗福寿庵観音菩薩坐像 墨書銘

明応 5 年(1496) 陸前高田市黒崎神社十一面観音菩薩坐像懸仏 墨書銘

向堂観音堂十一面観音菩薩坐像・常膳寺十一面観音菩薩立像・千手観音菩薩立像・不動明王立像・毘沙門天立像の作風が近いことより、この頃に造られたとも思われる。

これまでの 6 次にわたる調査において明らかにしてきた調査結果より、15 世紀後半の陸前高田市の社会・文化の日本史における位置づけが判明しつつある。



2. 文化遺産調査の 3D 調査 (奈良教育大学大学院修士課程 佐野宏一郎)



向堂観音堂十一面観音菩薩坐像のレプリカ作成の経緯

レプリカを作り、本尊の代わりとすることで、盗難などの被害から保護することができる。

三次元計測とデータ編集

デジタル化と文化遺産

- ・ これまでに述べられているデジタル化の意義 (福森 2011)

「記録の永続性」「実物の情報化」「意識の更新」

- ・ デジタル化することで教材として活用することが可能となる。地域の文化遺産の保全のためには、地域住民が「知る」ことが重要。住民主体の保護・活用・発信などの文化遺産の利活用。
- ・ 課題：未整理な権利の問題

3. 福寿庵観音菩薩坐像を主題とする子ども用教材の発表

(奈良教育大学 文化遺産教育専修 鈴木奈津・濱松佳生)

・「平栗福寿庵の聖観音菩薩坐像」像内墨書「観音」「應仁三〇
／〇／〇霜〇月」の紹介

- ・室町時代の東北地方、応仁の頃の概要
- ・観音像の特徴
- ・平栗福寿庵の伝承

「平栗の大屋」と呼ばれる管野家の先祖が、昔、戦いに敗れて、大和国（奈良県）から観音様を背負ってここまでやって来て、観音堂を建て、まつたと伝えられている。



4. 陸前高田市調査に基づく防災教育模擬授業

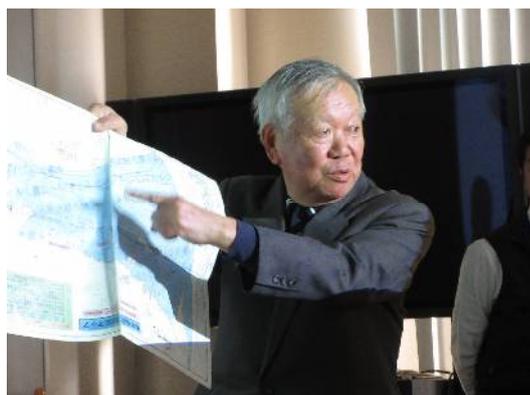
(奈良教育大学大学院修士課程 糸綾香、英語教育専修 森本珠美怜)



- ・心のケア重要性
市街地の復興は進んでいるが、家族や知人を津波被害で失った方たちの心のケアは十分だとは言いえない。聞き取り調査から、今も自責の念（自分だけ助かった。自分だけが幸せになっていいのか）で苦しんでおられる人が多いことに気が付いた。
- ・悩みを打ち明けることが心のケアになる。
- ・苦しんでおられる方どうしの声のかけあいによる気持ちの変化を、ロールプレイで体感する模擬授業。

5. 陸前高田市の震災復興と文化遺産調査について

(松坂泰盛氏、及川征喜氏、多田俊宏氏、菅野速男氏)



- ・三次元計測とデータ編集の難しさを初めて知り、感謝の気持ちでいっぱい。
- ・調査においでなったことで、初めて仏像に関する関心が高まった。
- ・東日本大震災以前の陸前高田市ハザードマップには、津波被害が想定される地域も避難所に指定されていた。そのため、避難所に避難して被災された方が多くいる。ある意味、人災ともとれる。

- ・気仙中学校では、避難マニュアルに従うのではなく、先生方の判断によって、全生徒が被災を免れた。
- ・自分の命は自分で守る。人任せにせず自分で考え、判断し、行動できる人を育ててほしい。
- ・被災者の心のケアの必要性は感じている。
- ・自分の家族は被災しなかった。家族を失った人に安易に声をかけることが、その人を苦しめることになる場合もあった。
- ・この3月で学校の敷地内にある避難住宅はすべて撤去される。災害復興住宅への転居が前提となっているが、震災後7年を経過して、転居可能な人と不可能な人にわかれている。支援金をもとに生活を

立て直した人、支援金を食いつぶした人だ。災害復興住宅は家賃が必要だ。災害時に高齢になっていた人たちは、自助努力で生活を立て直すのが難しかった。災害復興住宅に転居できない人たちのことが、大きな問題となっている。

